

『芳遠(ほうおん)先生と行く新・熊野詣——尾鷲から本宮まで』

信仰の道、熊野古道と社寺を巡る①～⑩

第1回、第2回 記録

世界遺産に登録されて2年が過ぎ、熊野古道を歩いたことがある人の数は、このごろは随分増えたことでしょう。しかしその中で、どれだけの方が熊野古道を歩いて心の底から満足を感じているのか考えると、いささか不安です。



信仰について語る渡辺芳遠氏

熊野古道を歩く意味を悟り、世界遺産登録された熊野古道の意義を理解して、何よりも自分自身が歩いてよかったと納得できる熊野古道を見つけるために、仏教に詳しい渡辺芳遠氏に相談してできたのが今回の10回シリーズの講座です。熊野に点在する神社仏閣を訪ねながら熊野古道を尾鷲から本宮大社まで歩く、「新・熊野詣」です。つまり、信仰の道として熊野古道を捉えなおし、信

仰の文化に触れながら熊野三山を目指すのです。

いよいよその講座が始まりました。第1回と第2回の講座は8月5日、6日のとりわけ暑い日に行われました。第1回は海山の鷲下から熊野古道馬越峠を歩いたあと、尾鷲市内の社寺と旧蹟を廻り、第2回は尾鷲市の南部、賀田湾に面した曾根の町を散策したあと、熊野古道曾根次郎坂太郎坂を熊野市二木島まで歩きました。本宮まで歩くこの旅が終了するのは、半年先の12月の予定です。

8月5日の午前中、2時間余りの時間をかけて馬越峠を越えました。歩き始めに芳遠先生から「人は思い通りの生き方ができないとき、神や仏に祈りを捧げてきた。そして、過去に対して罪障消滅、現在に対して現世安穩、未来に対して来世往來を願う。歩くということは罪の消滅につながる。」という主旨のお話をしていただき、鷲下を出発しました。



馬越峠を登る



古道で芳遠先生の話聞く

根石や大きな岩を巧みに利用した見事な石畳を登って行くと、ときおり涼しい風が木陰を吹き抜けます。夜泣き地蔵まで来たとき、芳遠先生の先導に合わせて『開經偈』『懺悔文』『お念仏』『般若心経』を唱えました。馬越一里塚を過ぎ、林道を横切り、峠に到着しました。遅れ始めた3名の女性の到着を待ち、幕末から明治維新にかけて活躍した志士、村松文三の『題壁』を芳遠先生が詩吟で聞かせてくださいました。

『題壁』

男兒立志出鄉關
學若無成死不還
埋骨豈惟墳墓地
人間到處有青山

「一たび志を立てて故郷を出るからには、もし学問が成就しないならば、死んでも故郷に帰らないつもりである。自分の骨を埋めるのは、何も故郷の墓でなければならぬわけではない。どこへ行っても、自分の骨を埋めるにふさわしい青々とした美しい山があるではないか。」という意味の漢詩です。若者が旅立つときの決意を詠っていますが、それを熊野詣への旅立ちになぞらえて聞かせていただきました。



尾鷲の金剛寺での講話

馬越公園に下りてからは、馬越不動尊、馬越津波供養塔、徳本上人名号碑、尾鷲神社を訪ねた後、護国山金剛寺をお伺いしました。ここは曹洞宗の寺で本尊は十一面観音です。仁王門には立派な金剛力士が立ち、熊野五カ寺の一つに数えられています。本堂でご住職から寺の説明を聞き、本尊をお参りしたのち、涼しくしておいていただいた待合室を借りて芳遠先生の講話がありました。

尾鷲を発心門とし、本宮大社に至るまでの道のりを修行門、菩提門、涅槃門と見立てて講座は進みます。そし

て「仏界」「菩薩界」「縁覚界」「声聞界」の四聖と「天上界」「人間界」「修羅界」「畜生界」「餓鬼界」「地獄界」の六道を合わせた10界に対照させて、10回の講座を進めます。今回は「地獄界」を中心に、この世界観についての解説を学びました。

金剛寺に御礼を申し上げて出発するとき、ご住職から一人ひとりに十一面観音のお守りを頂戴し、今後の道中の無事を祈願していただきました。

尾鷲市街に入り、中井町と古い商店街を通過して駅前に



曾根城跡からの展望

行き、バスで鷲下まで戻って今回の講座が終了しました。暑くてたまらない一日、水分を信じられないほど摂らざるを得ない厳しい環境でしたが、歩いた達成感と心の中に明りが灯ったような安堵感を感じることができた一日でした。

翌日の講座では欲しいと思う心、「餓鬼」について考えることを課題にして、曾根の町と曾根次郎坂太郎坂を歩きました。朝8時30分、昨日の疲れが残っていますが、



金剛寺の仁王門にて

JR 賀田駅前に集合です。最初に曾根城跡に登り、美しい賀田湾を見下ろしながら、室町時代の歴史に思いを馳せます。その後、首なし地蔵、曾根の道祖神、曾根弾正屋敷跡、飛鳥神社、曾根資料館、六地蔵灯籠などを見学しました。

途中、小高い所にある南秀山安定寺に立ち寄りしましたが、ここは本堂から賀田湾の眺望が広がり、海風が本堂を通り抜ける寺でした。本尊は木造阿弥陀如来立像の曹洞宗の寺です。本尊をお参りし、ご住職から寺の歴史を聞き、ここで昼食を取らせていただき



曾根の安定寺を訪ねる

きました。お茶のおもてなしをしていただいて静かに本堂に座っていると、本当に心が安らぎます。芳遠先生から般若心経の解説などの講話を聞いて、いよいよ曾根次郎坂太郎坂に出発です。



曾根次郎坂太郎坂を登る

次郎坂は海から標高305mの甫母峠までを1時間ほどで登る道です。普段一気に平気で登る人でも、この日の暑さは耐えがたいものがあつたことでしょう。幅の広い立派な石畳道をこの日も大汗をかきながら登りました。

ようやく甫母峠にたどり着き、ここでまず西郷南洲の『偶感』という漢詩を芳遠先生が吟じてくださいました。

『偶感』

幾歴辛酸志始堅
丈夫玉碎愧輒全
吾家遺法人知否
不為児孫買美田

「人はつらく苦しいことを何度も経験してはじめて志が堅固になるものである。立派な人は、たとえ玉砕することになっても、かわらのようなつまらないものになることを恥とする。わが家には先祖から伝わった守るべき家訓があるが、人は知っているであろうか。それは、子孫のために財産を買い残すことはしないということである。」と言う意味ですが、苦しい思いで曾根次郎坂太郎坂を歩いている中、心に染み入るような詩吟でした。

そして『開經偈』『懺悔文』『お念仏』『般若心経』を唱え、二木島をめざします。出発のとき芳遠先生が峠の地蔵に「全員が二木島駅で乗車予定の列車に間に合いますように・・・」とお願いをしてくださり、しっかり歩かなくてはと再び決意を新たに出発です。

太郎坂の長い登り下りの連続は、普段歩きなれていない参加者には大変つらい行程のようでしたが、みなさん本当に真剣に歩き、最後の人は列車発車の5分前に二木島駅に到着しました。この日も汗をたくさんかき、二日間であらだ中の水分が全部出てしまったように感じるくらいでした。しかし、この暑い季節にしっかりと二つの峠を歩き通したことは、これからの道のりを歩くときの自信につながったように思います。

参加者の方々は、遠くは四日市市や和歌山県在住の方々を含め、平均年齢が初日60歳、二日目55歳の老若男女です。案内の渡辺芳遠先生は70歳台ですので、決して若いといえないこのグループにとって暑さの中の峠越えはとても厳しく苦しい歩行となりました。歩きながら、平安時代に後白河上皇によって編纂された歌謡集『梁塵秘抄』の中にある、

熊野へ参らむと思へども

徒歩より参れば道遠し すぐれて山きびし

馬にて参れば苦行ならず

空より参らむ 羽賜べ 若王子

という歌を思い出しました。しかし、最終的に一人の落伍者も出ずに二日間を歩き通すことができたのは、この旅が単なるハイキングではなく、歩く道が「信仰の道」としての熊野古道であり、めざす熊野三山という明確な目的があったからかもしれません。

第3回目と第4回目は9月。少し秋の風が吹き始めているかも知れません。行程は紀南地域の熊野古道と周辺の集落の神社仏閣と旧蹟を歩き、最終回に志古から万才峠を登って小雲取越えに入り、請川に下りて本宮大社を目指します。本宮大社に到着するのは12月ですから、冷たい風に吹かれながらの歩行となることでしょう。信仰の道としての熊野古道を歩く旅は、これからが本番です。

(まとめ：紀南ツアーデザインセンター 橋川史宏)